

－研究ノート－

国際結婚夫婦における二文化性

ロジナ ナターリヤ

I 研究背景

日本は国際化が進んでおり、日本人も外国に出張などで行くことが増え、留学や仕事上、外国で長期生活する機会が増えたと同時に、来日する外国人も増えてきている。

人の移動の背景には様々な理由がある。日本は経済大国であり、経済的に発展している地域として魅力的である。

移動する場合、男性か女性かという性別によって、就く職業やそれによって得られる待遇も異なる（小島，1992）。

就業の機会を求めて他国へ移動する人は労働移民とし、結婚を目的に他国へ渡る人を結婚移民、主に女性、二通り存在していると考えることができる。

移民を受け入れ、職業の機会を与える国はそれほど多くはない。移民に対する待遇はその国の移民政策によって異なるし、市民権などの取得に関してもそれぞれ異なる。多文化主義の諸国としてアメリカ、カナダ、ヨーロッパの諸国が挙げられるが、これらの国は多文化主義を掲げ、移民を積極的に受け入れている。

日本は外国人の帰化率も低く、定住や永住する外国人の割合は高くはない。日本に滞在する外国人の就労率や地方参政権の可能性からみた日本社会の国際性は未熟な部分がある。

昨今、日本政府が掲げた多文化共生の政策は異なった文化的背景を持つ人々がお互いの文化的差異を尊重しながら、平等で公正な関係を築き、共に生きていくことである。つまり、日本人と外国人は出身国に関係なく、

文化を受け入れつつ、対等なパートナーとして暮らしていく。

国際化が進むと、国際交流の機会が増え、日本人は外国人と相互作用して国際結婚もますます増えるであろう。国際結婚カップルはゆくゆく子供が誕生し、家族という集団として暮らしていく。日本には新たな家族の形が生まれるかも知れない。

II 先行研究の視座

2.1. 国際結婚の研究動向

日本の国際結婚に関する研究では、国際結婚は国籍の異なる者同士という意味合いが強く、家族社会学などでは経済格差の背景が注視され、日本人男性の経済的優位性と外国人女性の結婚による不遇な境遇のリセットが注視されてきた（篠崎, 1996; 竹下, 2000; 賽漢卓娜, 2007; 西口, 2009）。つまり国際結婚は外国人女性側の上方婚という意味で研究されてきた傾向があり、異文化間結婚として文化的な点から着目した研究はさほど多くはない。

文化的な切り口からの先行研究の中では、国際結婚の成立条件として寛容の精神、協力、理解努力、忍耐が挙げられている（一ツ山, 2009）。寛容的精神に限らず、社会の寛容度も関係する（竹下, 1998）とも言われてきた。

国際結婚夫婦は言葉、文化、環境、家族形態を含め、いろいろな違いを体験し、生活世界や視野の広がりを得るとされる。それは異文化体験、交流を通して視野の広がりと言える（佐竹, 2012）。

異文化間結婚が成立し、結婚生活の中、異なる文化を受け入れ、尊重し、民族的マイノリティーが自らの文化を保持していけるかが問われる（デアノイ, 2012）。

外国の国際結婚研究では、夫婦に求められるものとして、差異を受け入れることと相手の立場になって考えることができること、忍耐と尊敬、それを子供たちにモデル化した形で伝達していくことが指摘され、国際結婚

のプラスな面として新しい勉強、生き方の見直し、個人的に文化の懸け橋になり得ることが指摘される (Roer-Strier, 2006)。

国際結婚は冒険のような新しいことではなく、内面化したことであり、国際結婚夫婦は結婚相手に会う前から国際性の特徴の備わった者同士であり、日常生活に国際的なライフスタイルが既に出来上がっており、結婚はあくまでその拡張または延長 (Cottrell, 1973) だと指摘される。

国際結婚に関する研究、日本では経済的な切り口、外国では文化的な切り口から行われてきた。

2.2. 先行研究における多文化家族 二文化性とその継承

国際結婚は異なる文化圏出身者の結合であり、その意味では多文化家族の結成のきっかけになり得る。

配偶者双方の文化の組み合わせが行われる場合、新田は二文化家族という概念を用いた。これは異なる環境に育った男女がそれぞれの「文化」を担いつつ暮らす家庭 (新田, 1992) を意味する。一方、武田は国際結婚により形成された家族のことを、多文化家族という概念を用いて説明した (武田, 2012)。

筆者は多文化家族を次の通り定義する。異なる集団の者を配偶者として選択し、家族を形成し、生活を営む家族である。ここでいう文化とは社会を構成する人々によって習得・共有・伝達される行動様式ないし生活様式の総体をいい、(言語・習俗・道徳・宗教の制度などがその具体例である)。

地域の異なる者、食文化の異なる者、階層の異なる者など異なる文化背景を持つ個人の場合も成り立つのかという疑問があるが、ここで紙幅制約があるため、触れないこととする。

国際結婚夫婦は多文化的なはずであるが、日本での国際結婚についての先行研究では、傾向として外国人女性の妻が合わせる傾向があると指摘されてきた。日本人男性と結婚する中国人女性 (賽漢卓娜, 2007)、東南アジアから出稼ぎなどで来日する「危険な」集団と見られがちなフィリピン人

女性（佐竹，2012），定住への主要なルートとなる結婚を目的に来日するロシア人女性（ムヒナ，2011）など，彼女らは経済規模の小さい地域の出身者であり，アジアまたはアジアの周辺国の中，日本は経済大国として非常に魅力的である。彼女らは一昔前の日本人女性のような従順で素朴なイメージとして結婚市場で商品化されてきた。

日本人男性との出会いは日本国内で出会うが，仲介的であり，偶然には任されていない自然な状態ではない。ブローカーを通して花嫁として来日したり，出稼ぎに興行や研修などの形態で来日する女性の移動の背景には経済格差があり，日本での就労は興行が主流であり，その場合，若年齢，女性性が求められる。一方，人手不足の製造業や介護などの分野で実習生，研修生として穴埋めで単純労働者として求められることもある。彼女らは社会経済的に，不利な状況をリセットするためにホスト社会である日本の男性と結婚する。

彼女らは接客業の中で習得した日本語で配偶者と相互作用する。日本語は体系的に学習しておらず，言語化された形で出身文化が表出されにくい。配偶者の日本人男性と在留資格上の拘束などから従属的關係が成立しており，彼女らは強制的に同化せざるを得ない。彼女らは決して自ら進んで同化するのではない。

一方，日本人男性とアメリカ人女性（新田，1992）が結婚した場合，経済格差はあまり見られない。日本人男性は英語を習得し，アメリカで生活した経験もある。日米国際結婚夫婦の場合，出会いにも一定の偶然性があり，移動の背景には経済格差がない。男性の協力的な姿勢などがあるため，外国人女性は同化をさほど促されることもない。

日本人男性と結婚した国際結婚夫婦ではなく，日本人女性を配偶者として選ぶ外国人男性との国際結婚はどうだろうか。台湾人男性と日本人女性の国際結婚（竹下，2000）の場合，日本人女性は配偶者の出身社会に適応するだけでなく，日本の文化も保持していく。カナダへワーキングホリデイに渡り，ワーホリ嫁とも呼ばれるようになった日本人女性は昨今，グ

ローバルに活動する中、香港やトルコなどグローバルシティーで外国人男性に出会いやすくなった。彼女らの出会いは偶然性があり、結婚後も日本人女性が働けるという面では対等なパートナーシップを構築している。彼女らの文化資本が高い（開内，2012）点が指摘される。居住国を自由に選べ、言語の境界線がないような国際結婚によって形成されたグローバルファミリーの家族モデルも昨今見られる（開内，2012）。このタイプの家族は三文化家族として捉えることもできる。国際化の進展により三文化家族も存在し得る。国際結婚した夫婦がそれぞれの文化圏と異なる環境に居住する場合など、日本国内で日本人配偶者と外国籍の者が結婚し、結婚後に日本人側（主に日本人男性）の勤務状況などの都合で他国に派遣され、その際、外国籍の配偶者が日本の文化も日本人配偶者が派遣された先の国の文化も吸収することになることも考えられる。

国際結婚の場合、配偶者双方が同じ社会で生れ育ったわけではない。同一社会に生まれ、育っている場合、文化的に重なり合う部分が非常に大きく、苦痛や苦勞を伴うことない。微調整程度で新家庭が維持されていく。平均的な日本人同士が結婚し、家庭を持った場合には、夫と妻の両方にこの二極化への認識と受容があり、そのためこれが原因となって大きな問題が持ち上がることはない。彼らはいずれも、この役割分担を受け入れるように教育され、社会化されている。

異文化間結婚の場合、異なる国とかけ離れた文化を背負う二人が結婚し、一つの家庭をもつこの時、両者の文化の衝突は相対的に先鋭化する。結婚生活や家庭を維持するに際して並大抵でない努力が必要とされる。外国人配偶者、そして子供が家庭の内外で突き当たる困難や障害を乗り越え、生きていかねばならない。相互に妥協しあい、理解を深め合いながら結婚生活を維持していく家庭もある。順応して慣れるしかない場合もある。しかし、国際結婚をした家庭にはメリットや強みが内在し、これは困難克服の有力な手段となる（新田，1992）。

国が違い、言葉が違い、文化が違うことからくる摩擦を避け、調和のと

れた夫婦になるために人一倍の努力をしなければならない。日常生活上のズレは二人の努力と理解によってある程度解決できる。(ヤンソン, 1982)。

多文化性を保持するには度合いはその夫婦によってそれぞれ異なる。生活様式の中に伝統を取り入れ、多文化性を保持するために相当な努力が必要である (Cottrell, p.164)。家族の友人はそれぞれの国出身者・家族生活の中でそれぞれの文化の要素が存在している。

Ⅲ 課題設定

本稿では、日本で国際結婚をした夫婦に焦点を当て、どういう形の家族であり、どういうふうに家族生活が営まれており、生活パターンの違いについて論じたい。外国人配偶者の生き方を見ることによって日本社会の動きをみることができると考える。なぜならば、日本社会で一生活者として生きる外国人配偶者の姿が日本社会の鏡となるからである。

先行研究では外国人女性にインタビューを行ってきたが、本稿では日本人の配偶者にも主にインタビューすることによって、より立体的な語りとなる。

国際結婚をした外国人女性は多くの場合、経済的理由で結婚を決めたという目線で研究されてきたが、本稿では経済的理由でない理由で来日し、日本人を配偶者として選択し、日本で結婚生活を営むこととなった女性に焦点を当て、彼女の語りから外国人女性はどのように出身文化を表出し、日本社会で暮らしているのかに着目したい。

3.1. 調査概要

機縁法で国際結婚をした夫婦一組を対象に外国人の妻と日本人の夫、二人に半構造化インタビュー調査を行い、結婚に至る経緯、生活様式などについて質問を行った。また子供の生活スタイルに関することに質問を設け、子供にコンタクトをとるように心掛けた。

以下、(w) 英語のwifeの意であり、(h) は英語のhusbandの意である。

(c) はchildの意である。

3.2. 日本人男性と結婚した外国人 ～女性の日本家族生活の事例～

3.2.1. ライフストーリー概要

Kさんは1960年 東ドイツ, Bad Saarow生まれ

Bad Saarowはベルリンより70キロほど離れた郡である（現在、ブランデンブルク州になる）

1976年 職業学校入学

1979年 フンブルト大学入学 文学部日本語学科

「言語をやりたいかったですよ。東ドイツはロシア語と英語はすごくたくさんの人がやっていたから、それと違うことやりたかったですね。人ができないこと。もう一つはアジアに興味があったんですよ。もう一つとして、地理が大好きでした。日本列島は面白いと思いました。…（日本に留学に）来る前は日本人と交流はあまりなかったです。東ドイツにはあまり日本人いなかったの、西ドイツはまた違うと思うけど。」

1983年～1984年 大学4年生の頃, 東海大学留学

「私の大学と東海大学と契約がありましたね。その契約で2年一回6人行くことができました。私の大学、入学は2年にしか1回なかったんです、日本語が。日本語は毎年じゃなくて、2年に一回だけ。まだ東ドイツだったから私の学年はまだ12人でした。合わせて12人。大学は当局に申し込んで、12人のうち1人しか行けませんよって最初から言ったんですよ。なんで私が行けて、他の人は行けなかったのかは分かりません。すごいラッキーでした。」

学生宿舎で現在の配偶者に会う

「学生寮。基本的に外国人専用でしたけど、男子3人と女子3人がそこに入って、外国人の世話をするというで…うちの主人は第二外国語、ロシア語だったから、その寮にモスクワ大学の学生たちが来ていたんですよ。そこに興味を持って、寮に入って、で、まあたまたまドイツ人（私）がいたということ。寮は安かったんですよ。基本的にはそこには日本人の学生が入らなかったんですよ。外国人の世話をする人だけ入れた…」

1985年7月 フンブルト大学卒業

1985年9月 国営大手翻訳会社に就職

職種：通訳 業務：独英和通訳・翻訳

「交際の頃、コミュニケーションは日本語でした。日本語を勉強していたので、最

初から全部日本語だけで。(これからのことは)心配でした。字は習ってなかったの。」

1986年8月 旧東ドイツで入籍

(h):「(付き合ったのは)大学4年生の終わりの半年くらい, 実質は半年くらい。それで, (交際)は二年間くらい。彼女は東ドイツで, 僕は職業決まっていなかったの。それで公務員になって25歳の夏に結婚しました。遠距離恋愛。国のシステムは違うので, そんな簡単に入れないので, (やりとりは)手紙だけだった。」

「1986年の夏に結婚して, ビザをとるのが時間かかったから11月にここに来ました。」

1986年11月 来日し, 日本人配偶者の地元である広島県三次市で生活

「三次は全然財産がないです。普通は田舎で家を持って, うちは違う。何もないです。最初の頃, 3ヶ月だけいました。結婚した時に, 何もなかったんですよ。私は東ドイツから来たから少しお金があったんですけど, 両替できないじゃないですか。東ドイツのお金だから。主人も仕事を始めたばかりなので, お金も何もないから。3ヶ月だけは一緒に三次に住んでいたんですよ。主人は三次の近くの学校で働いていたんですけど。田舎のね。主人は三次, どこでも仕事がありそうでしたけど, 私は三次で仕事がありそうになかったんですよ。英語の塾をやりたくなかったし。やっぱり翻訳とかやりたかったから。」

1987年4月 広島県広島市の某中小企業に正社員として就職。

翻訳の業務に携わる

「最初の2年間, 社員で, それからパートで。」

1987年~1988年の間, 日本人配偶者は三次勤務だったため, 離れて暮らす

1988年~1990年 配偶者の広島市への転勤に伴い, 広島市戸坂 賃貸マンションに同居

1990年12月 辞職。安芸中野区に分譲マンション(3LDK)購入

「仕事はあまり満足してなかったんですよ。会社が英語の翻訳とかあったんですよ。私は翻訳やりたいんですけど, 仕事はタイプとか間違った英語を直すとか, すごい嫌だったから。フリーランスでやりたいと思いました。自分の依頼者を探して。少しずつやろうと思って。ドイツ語の生徒たちを集めて翻訳やって。会社をやめようと思った時に子供が生まれた。」

1991年 長男出産

1993年 二男出産

1995年 三男出産

1995年 分譲マンションを離れる 安芸中野区畑賀で一軒家を購入

「土地が安かったし、自然が多かったから。そういうようなことで決めたんですよ。落ち着いた場所なんですよ。子供が3人目生れるからマンションが狭いと思って。」

以上、Kさんの半生を夫との関係を中心におおまかに述べた。下表は2013年現在のKさん一家の状況である。

妻	職業	夫	職業	子どもたち
50代前半	翻訳 フリーランス 語学講師	50代前半	教員	長男 22歳 (1991年生まれ) 某国立外国語大学 ロシア語学科4年生 次男 20歳 (1993年生まれ) 某私立大学 ドイツ教養主義を基礎とする大学 法律専攻2年生 三男 18歳 (1995年生まれ) 某国立外国語大学ドイツ語学科志望 高校3年生

3.2.2. 企業文化 就業経験を通して学ぶ企業文化

就業する前からKさんは元々、日本文化に関心があり、理解のある姿勢で日本文化を受容していた。日本の企業組織に固有で独特な観念、行動上の特性を学ぶ。Kさんは、一人の従業員として日本企業に受け入れてもらい、Kさんは企業という形での日本の社会システムを経験し、日本人の行動パターンを受容していく。服装の規定、社則、休日の規定を組織の一員として従い、また異なる文化圏の行動パターンを受け入れた。

K (w) : 「小さい会社でしたから家族の会社。お父さんが社長で、お母さんが専務。お母さんがいつも着物で仕事きたんですよ。きちんとした感じで。何人かの男の人たちは営業で仕事を持ってきたりとか。翻訳とかタイプの仕事とか何人か事務の人がいました。」

面白かったです。本当に面白かったです。言葉の勉強のためにすごくよかったですよ。お客さんとかとじゃなくて、書いたりする仕事だったから私が外国人だったから間違ってもそんな大きな問題じゃなかったけど、でも周りの人を見るのがすごく面白かったですね。勉強になりましたね。あの時は不満たくさんありましたけど。仕事はね、やりたい仕事じゃなかったし、厳しい専務もいたんだけど。厳しかったんです。女の人はみんなスカートで会社に来ないといけないとかね。全然誰も会社に来ないのにね。もしお客さんが来たらきちんとしなきゃと。会社始まる前に女の子みんな掃除するので。8時45分までに会社に入って、みんなで掃除して、9時から仕事。

会社の女の人は月に2回土曜日休み。男性は月に1回土曜日休み。

私は入った時にカレンダーが貼ってありましたね。誰がいつお休みか。自分の名前が入ってないんですよ。専務に聞いたら「あなたが入ったばかりだから3ヶ月、毎週土曜日仕事ですよ、と」びっくりしましたよ。(愚痴)は言わなかったですよ。今思うと、よく我慢したなど。辛いと思わなかった。修業。」

日本の企業文化は独特だと言われるが、休日などとりにくい面も含めて労働を継続していくKさんは日本人の配偶者の就労状況、そして今後のキャリア形成の点では大きかった。日本で仕事をし、今後キャリアに結び付けたいという思いだった。地域の産業構造によって就業の機会も限定されやすく、とりわけ外国人の特技やスキルと一致する企業は限られる。従属関係が成立する組織で一人の従業員として役割を果たしながら、上司が求める日本的な行動基準を受け入れた。このようにKさんは企業文化、ルールを受容していく中で、日本社会のルールを受容していったとも言える。

3.2.3. 地域のコミュニティーから排除 ～地域のママ友文化と孤立～

Kさんは日本で学校生活を送り、後に日本の企業で就業し、企業文化を体験し、日本文化を理解して公的な場で生活してきた。

一方、私的な場面では、Kさんは日本人女性が経験しないようなことを経験する。

K (w) : 「お母さんたちは子供たちを遊ばせて。子供がまだ小さかったんですよ。上の

二人がいて。外で砂場とか子供が遊ぶところありますよね。子供を連れて、そこに降りて、当然お母さんたちとおしゃべりするんですけど、どうも変ですよ。一人ひとりが親切で私としゃべるんですけど、彼女たちがグループの時、私はそこには入れないですよ。そばにいても入れてもらえないんですよ。お母さんたちは働いていないし、子供小さいから、雨の日は家に来て、お母さんたちがおしゃべりして、子供を遊ばせることがありますけど、私を誘ってくれないんですよ。お互いに悪い意味じゃないんですけど、中に入れてもらえない。もう一つは、子供が幼稚園に入った時は、子供はバスで送り迎えがありますよね。バスが来るのを待つじゃないですか。お母さんたちが。そこに同じようにお母さんたちが輪になっておしゃべりするんですけど、私はそこには入れないんですよ。話の内容じゃなくてグループなんですよ。3人4人とかいて。私はそのグループの中に入れてもらえない。あれは辛かったです。本当にすごくしんどかったです。今のところに引っ越してからじゃないです。あのマンションは130世帯の大きなマンションでしたね。若い人が多かったから子供たちも多かったですよ。うちの子供たちの同級生が何人かいました。一人一人は良い人で、お話できるんだけど、彼女たちはグループになると、変わるんですよ。」

日本のママ友とは、「子供を通じて知り合った母親仲間」、「母親同士の友人関係」であり、通常の友人関係とは異なり、子供を介した間接的な関係がベースになるという特徴を持つ（實川，2012）。ママ友とは居住地域や子供の教育施設を共有する点では、接点を持って、生活情報などを共有し、相互作用していく。

Kさんが連続して使う「中に入れてもらえない」の語りから地域のコミュニティから排除された精神的に辛い経験が浮き彫りになる。

日本人の母親集団から疎外された気分を味わうことになり、自己が内集団の者として扱ってもらえない。自ら日本文化、日本社会のルールを受容してきたのに日本人の集団に受け入れてもらえない。個人的な関わりは可能であるが、集団の一員として受け入れてもらうことが困難である。その結果、子育てで情報を得たり、子育てに対する安心感を得たりすることは困難となる。

ママ友は「自分と同じように感じる」同質感が重視される（實川，2012）傾向がある。

女性の出身社会と配偶者の社会では女性性（social womanhood）の定義

にはギャップがある。女性の役割意識や女性のスキルは出身社会では自分の母親によって伝達され、配偶者の社会では義理の母親によって教わる。この際、居住形態（同居・別居）によって伝達も異なると考えることもできる。Kさんは結婚後、就労状況などの関係で配偶者の家族と離れて暮らしていたため、その伝達はなく、子育て支援も期待できなかった。

女性は子供を介してホスト社会とつながり、もう外国人でもなく、現地の社会の者でもなくなり、子育ても将来的に配偶者の社会の一員として育てていかねばならない (Imamura, 1988)。Kさん本人にとってママ友とのつながりは日本社会との接点でもあった。ホスト社会で生活する外国人女性の規範の内面化の度合いによって、配偶者との関係性、配偶者の親戚や子供、他の結婚移住女性ら、その家族との関係性が大きく異なる (Imamura, 1988) と指摘されるが、配偶者の社会で一定の経験値があり、理解する姿勢と心構えがある外国人配偶者であっても、大きな問題に直面する。Kさんは理解する姿勢も結婚出産前に一定の日本社会での、経験値を持っていたにも関わらず、ママ友に受け入れてもらえないという面では彼女らの存在は大きかった。

結婚して移住する女性の生活についての先行研究の中でも、孤立が指摘されてきたが、好悪感の要因は日本人の外国人の出身国に対する軽視によって異なる (田辺, 2008)。その点、Kさんの出身国は欧米諸国であり、親近感が高いはずが、Kさんと地域のママ友とは心理的距離が大きかった。先行研究の中では外国人女性、アジアからの嫁で差別されてきたと言及されるが、アジア地域に対する好感度はマスメディアなどによって植え付けられる側面があり、それが個人の意識、行動に現れることがある。

Kさんは子育てをし、地域の人と関わりを持ちたかった。彼女は日本語もできており、言語化された相互作用は可能であった。外国人女性は配偶者の言語ができない場合、ネットワーク形成が困難となり、その社会の女性たちと話すことができず、子供の友達とも遊ぶことができない。子供のケアをするにあたって本などを通して情報を得ることも難しくなり、可能

性が限られてしまう。また不安を伝えることもできなくなるなど指摘される。しかしKさんの場合、本人の言語能力を超越した形で孤立しがちであり、地域の母親とは関係の形成が困難だった。Kさんはその自分の所属集団を探し求め、行動をする。

それはKさんが自己のアイデンティティーに気づかされるきっかけにもなった。Kさんは企業の中も地域の中も受容的だった。しかし自分が異なる存在として扱われていることを再確認するようになり、自分らしく生きていける仲間を求めた。Kさんは、国際結婚した家族のサークルを設立する。会費は無料であり、Kさんはリーダーとなる。つまりKさんは、国際結婚した家族グループを所属集団として作り上げようとするのである。

3.2.4. 自分なりのコミュニティの確立

Kさんが作り上げたサークルは仲間意識を共有し、抱える悩みを共感しながら、お互い支援することを目的とした。

K (w) : 「一人、ドイツ人のお友達がいたんですよ。小さい子供がいて、よく会ってたんですよ。彼女もいろんな友達がいたりして、話しすると、みんな同じことで悩んでいるねーと。サークル作ろうと考えたんですよ。月に一回、公民館の部屋を借りて、何かのテーマで話し合ったりとか。

日本人女性が多くなったんですよ。どうしてかは分からない。日本人女性を中心にあって。サークルは日本的になったんですよ。彼女たちが持っている問題はやっぱり私たちの問題じゃないんですよ。彼女たちは自分たちの国で住んでいるよね。ガイジンさんの旦那さんがいるんだけど、やっぱり違うんですよ。決して私たちに悪いとか親切じゃないとかそんなことは決してなかった。でも、理解は違うね。旦那さんがとにかく仕事いくじゃないですか。女性は外国人で旦那さんが仕事いくけど、子供を育てないといけない。全然立場が違う。面白いんだけど、私たちの世界じゃない。毎日見ていることとか会っている人とか違うじゃないですか。だから、どうもお互いに…。

なんでサークルはうまくいかなかったかは私は分かりません。時期はあると思います。子供が大きくなって、仕事を始めて、サークルに出られなくなるとか、リーダーは毎回出ないといけないので。集まるだけではなくて、集まって何かしないといけないですよ。テーマを考えたりとか面白いことやったりとか。

みんなの共通点は外国人でした。それが足りないと思います。外国人っていろんな

人がいますね。同じ国だから仲がいいとは限らない。

外国人男性も来ましたけど、日本は（サークル）女性がやるんでしょう。」

Kさんらメンバーは、国際結婚した女性として同質感を求めるが、異なる部分があり、関係の構築は困難であった。ホスト社会において子育て支援が得にくい外国人女性は外国人男性と結婚した日本人女性とは境遇が異なる。国際結婚をした母親同士の集まりだけというのでは、メンバー同士の関係が成立しにくい。地域のママ友なら、同じ日本人、同じ地域、同じ年代、同じ年齢の子供を持つという接点があり得るのだが、更には、日本人と結婚した外国人女性の間でさえも、彼女たちの社会的属性などにはバラつきがあり、共有しきれない部分がある。

しかしコミュニティーをつくり、そこで活動をするというKさんの行動の背景には日本社会の生きづらい面が見えてくる。

Kさんのサークルでの活動、公的領域で努力は地域や企業で日本的でない存在の再確認、そして外界とのつながりを持ち続けられる機会だった。東ドイツ、社会主義圏の家族モデルでは女性が公的領域でキャリアを結婚、出産を機に中断せず、継続していく出身地域の男性を配偶者として選択し、家族生活を営むという場合、Kさんの家族生活が大きく異なる。

3.2.5. 家庭内の食文化 日本の伝統料理を受容

Kさんは母親としてママ友と交際する努力をしただけではない。彼女らは嫁して日本の家族の一員として私的領域で食事を支度し、提供していく役割を果たすために日本食を習った。

K (w)：「お祖母ちゃんはずっと仕事していたんですよ。店をやっていたので、お正月だと、すぐに開けないといけないんですよ。だからお正月、かなり何年か前にうちに呼んだんですよ。お正月はお祖父ちゃん、この人のお兄さん、みんなうちに来たんですよ。だから、私はお節を用意して、みんなで日本のお正月。本を見て習ったんです（お節）。家族は食事について全然うるさくはありませんから、適当に作りましたから。最初は頑張って作りましたが、後は生協、スーパーで買ったりとか。買って詰めるとか。お餅

を用意したり、全部私は作りました。」

出身の食文化を家庭内で用い、実践していくことは一つの選択肢だったと考えることもできるが、Kさんは出身の食文化を表出せず、和食、日本的な食事を提供することを意識した。日本人の配偶者、そしてその家族、更にその後、日本人の配偶者の間で設けた子供のための食事の支度が日本社会で女性に期待される役割を担うことも性役割分業意識のあらわれだったとも言える。

K (w):「ドイツは夕食、温かい料理しません。温かい料理は昼。夜はパンを食べます。サラダをつけて。ソーセージとか。結婚して、日本に来て、やっぱり夕食をちゃんと調理しないとイケないですね。本を買ってきて、習いました。多分、普通の日本の奥さんのようなレパートリーだと思います。何でも。和食とか洋食とか中華とか。義母は元々あまりしないんです(料理)。別で住んでいましたし。逆に私は作るのありがたいと。

私は日本の食パンはよくないと思っていますので、自分で作っています。ホームベーカリーで。前はホームベーカリーはなかったので、手でこねて作りましたね。」

Kさんは「日本の奥さん」をスタンダードとし、目標として調理スキルも習得し、日本の食文化も受容していった。Kさんは自分の嗜好に合ったものを自分なりに作ることもあるが、日本食を優先し、抑圧してきた点では出身の文化が子供世代に継承されていない。なお、外国製の食品を購入することがあるKさん一家には日本的な食文化にあくまで追加された形である。

3.2.6. ～一人の母親として～

Kさんは子供の学校生活を通して日本社会とつながり、負担と感じることもあっても、一人の親として役割を果たしていく。出身社会と異なる部分が目につくが、子供は日本の学校で一人の生徒として受け入れてもらっており、面倒を見てもらっている以上、母親として「日本のお母さん」をスタンダードとして強く意識し、行動モデルとして合わせていくようにし

ていた。

K (w) : 「私は日本のお母さんに負けないように頑張っていました。子どものPTAとか幼稚園のPTAとか。向こうではPTAは2人〜3人でやります。日本では、大体みんなやりますよね。剣道クラブ、ソフトボールクラブは、子どもたちの親がやるので、それは結構しんどいので。中学校になると、野球とかやっていたので、親同士で手伝うクラブ。」

Kさんは日本の大学で勉強したこともあり、会社で就労した経験も持っており、日本語も日常会話として使用できるが、漢字圏出身者でないため、文字の読み書きは不自由を伴う面がある。子供の学校生活の中で学校とのやりとりをすることがあり、その負担は平均的な日本の親とは違う。

K (w) : 「学校から通知が来ますね。私は日本語読むと、普通の日本人より倍以上の時間かかるから。それは嫌でしたね。」

Kさんの「負けないように」という表現には外国人女性としての周遍的な位置づけも伺える。母親の役割を担うKさんは生活する社会構造に強い性役割分業が働いており、父親の育児参加さほど期待されない社会の中で困難を抱えながら自ら調整し生きている姿を伺える。

3.2.7. 夫婦文化の差異

国際結婚の夫婦はそれぞれの出身文化があり、それぞれの出身文化で社会化された家族モデルを異なる文化の配偶者に求める傾向がある。日本人と結婚した外国人の出身社会が日本と似通った文化圏なら家族モデルも類似点が多く、調整の幅も大きくはないはずである。日本の家族は東アジア家族モデルとして性役割分業意識が強く、欧米社会の夫婦の文化と大幅に異なる。特にKさんは夫婦で一緒に出掛け、ネットワークを共有し、行動すること期待するが、これは日本の家族ではみられないパターンであった。

K (w) : 「大昔にね、結婚したばかりの時に、職場の、この人の職場のパーティーにね、私を連れていってくれたんですよ。ドイツはそうするんだからと。私はそこで違うものだから、あまり気持ちよくなかったから。だから、もう。向こうはみんな親切なだけで、やっぱりちょっと違う。だから、私はもういい。」

増田は日本家族の夫婦のありかたをアメリカ家族と比較して、後者では夫婦そろって公的な会合に参加、出席していることを論述する。それぞれの生活領域における情報をお互いに交換し、そのために、お互いがお互いの身の上について、充分知り尽くしているという。しかし日本家族の夫婦は男女の性別によって所属集団を分けるという基本的な傾向があり、夫婦単位に行動するという余地が著しく制限されており、夫婦本位といても、それはたかだか家庭の範囲にとどまらざるを得ないという（増田、1978）。

Kさんも配偶者の職場、その仲間に入れてもらい、そこで話題を共有しようとするが、それは困難だったため、諦めている日本家族の夫婦のありかたに自らの行動を調整している。

Kさんの調整の仕方は自発的であり、配偶者による支配されて生まれてきた行動パターンではない。

K (h) : 「外国人じゃなくても、妻を連れてきませんからね。まず。日本人は。ドイツ人だからということだったからプラスアルファで、他の人は気を遣うんですよ。話ができない。珍しがられますよ。」

Kさんは行動パターンを変えていくことを日本人の配偶者に求めず、配偶者への配慮だったであろうが、夫婦の行動パターンを日本風に合わせ、日本家族に限りなく近づいていき、同化していく。なぜ彼女はそのパターンを変えることはできなかったのだろうか。性役割分業意識離れした形より柔軟なパートナーシップ形成は困難だったであろうか。そのようなパートナーシップ創出が阻害されているような社会環境だったことが考えられる。強い性役割分業意識の日本社会で暮らすKさんは困難を抱えなが

らも配偶者との関係を築き、その中で子育てをしてきた。

3.2.8. ～家庭外での出身文化表出～

Kさんは子育て期が終わり、現在、翻訳の仕事を在宅でしながら、ドイツ語のプライベートレッスンを行っている。そこで自分の言語文化を伝達し、出身文化について教えていく中、家庭外で自分の外国人としてのアイデンティティーを再確認することとなる。

視覚的に異質感のある容姿を持つKさんは就労などの目的で来ている外国人ではなく、日本人の配偶者として認識され、周囲と関わっていく。

K(h)：「町内会では自国文化の紹介はありました。地域ではあまりない。お正月は地域の女性たちが集まって、食事つくってすることはあるんですよ。その時に妻が出て、日本語できるし、お節とかできるからあまり違和感ないんですよ。だから外国人として扱われているというわけでもない。最初は珍しがられ、こんな顔していますから、でも、慣れたら大分普通に。地域には外国人はいない。ブラジル人は多いけど、日本人と関わらないので、彼らは自分たちで。」

配偶者の語りから視覚的に異なる容姿地域の住民として受け入れてもらえるという安心感、そしてKさんの出身文化が表出されていく誇りのようなものがみてとれる。

3.2.9. 子供の進路・子供の選択

下の引用から明らかなようにKさんの言語文化は、絵本の読み聞かせを通して伝達されるはずが、継承されなかった。子供の出生順もあり、長男は母親と過ごす時間が他の子供より長く、母親の母語もより強く伝達されやすいと考えられるが、「プレッシャーをかけたくありませんでした」という言葉からも分かるようには自分の言語伝達の意欲を抑え、日本語のみを使用するようになった。また父親のドイツ語のスキルがなかったことも、日本語のみが使用される流れを加速させた。

K (w) : 「幼稚園からずっと同じなので。地域は狭いので、同じメンバーだから。みんな知ってるから。小学校が小さいです。子どもたちはみんなお互い知っています。子どもたちは問題なかったですね。日本の絵本はお父さんが読んでくれました。私はドイツの絵本を読んでいました。歌、私は歌っていました。小さい時にはね。上の子は一人だったから、まだ兄弟いなかったから、私がずっとドイツ語しゃべったから、初めての言葉はドイツ語だったかな。二人目と三人目は上の子がいるから、日本語聞くから。」

私は読み書きを教えていません。話すことだけ。それで、幼稚園くらい、ドイツ語の能力は半分半分でした。ほとんど同じレベルでした。でも、小学校に入ると、すぐ日本語。ドイツ語はダメになりました。そこで、積極的にドイツ語を教えていれば、何とかなったかもしれないですが、私はそれしたくありませんでした。プレッシャーをかけたくありませんでした。普通に学校に楽しく行っていればそれでいいと思っていました。」

Kさんのドイツ語を伝達したい思いはなくてはなかった。ドイツに帰省する度に長期で滞在し、本人のリフレッシュに限らず、子供を現地で教育させるという形で伝達を試みていた。

K (w) : 「ドイツに連れていったことがあります。小さい時は長くいると、お互い、ドイツ語しゃべるようになったんです。せっかくドイツ語できるようになったのに、日本に帰ってきて、またすぐ日本語になったんです。夏休みはドイツに帰って、その翌年は家族でどこか行く(キャンプ)。二年ごとにドイツに行っていました。帰る時は長く、2カ月～3カ月くらい。少しだけドイツの学校と幼稚園に入れていました。4週間くらいでしたかね。」

Kさんの配偶者にはドイツ語のスキルはないが、ロシア語を学習し、留学するという経験があり、子供たちにそのような刺激を受けてほしい、喜びを味わってもらいたいという理解はある。それを応援し、協力する姿勢も整っている。

K (h) : 「小中高は日本語の世界だったので、大学くらいになると、ドイツ語に目覚め、日常会話はドイツ語が増えています。一番下はまだ高3ですけど、進路として東京外大のドイツ語科を希望しています。ドイツ語を普通に聞いています。二番目はドイツ語には関係なかったんですが、大学でドイツ語をとりました。法律なんですよ。大学で、ドイツの学校ですから、自分でドイツ語を習い始めました。ドイツの大学に入る、そこま

では検討していませんけど、私たちは考えたのは日本の大学に入って、そこから留学に行きたかったら行けばいいし、ずっと日本にいたかったらそれでもいいと考えました。」

Kさんの配偶者の教育方針は、出身社会の教育を受け、そこから先、将来的に強みとして生かせるよう、または国外で自ら活躍していけるように育てていくというものである。ドイツのテレビなどを視聴し、子どもが母親の出身社会のことを学び、二文化性を身につけていくことを促すような考え方である。

K (h) : 「僕の方はストレートに言う方だから、子どもたちには。性格ですよ。ベーシックは日本の生活でびしっとやっていますから、それに身に付けた感じですね。プラスアルファで。マイナスにはなってないですね。どっちが邪魔になるとかそういうのはないですね。小中高は日本だったけど、今は下がってきていると思いますね。日本人の分が。逆にドイツになってきているんです。重点が。大きくなっている。ヨーロッパの考え方が。そっちの方が。将来的にそっちで働くとか。向こうのテレビを見ていますし。」

3.2.10. 子どもへのエスニシティの伝達・生き方と働き方のヒント

Kさんは日本人の配偶者の間に設けた子供は父親の日本の文化、そしてKさんの出身のドイツの文化を両方持ち合わせていると考えられるが、居住国は日本ということと、Kさんの文化表出がさほどされてこなかったため子供世代の日本文化が強い。子供世代は家族集団の資源、語学力を特典を生かして人生設計をする。

K (w) : 「音楽が好きで、ドラムが趣味です。本当は、ドラムで生活できればプロになりたいのですが、これが難しいことが彼もよくわかっていますから、とにかく普通に大学に入る予定です。自宅で翻訳している母親を見て、翻訳で生活費を稼ぎながら音楽ができる、と彼が考えているようです。」

K (c 3) : 「(ドイツ語学科希望) 英語を通じて語学に興味を持ったから。そして自分のアドバンテージを生かそうと思ったから。文化、政治、歴史には非常に興味を持っています。こういったことも大学に入ってから勉強すると思います。」

IV まとめ

Kさんの事例から国際結婚家族のありかたを見てきたが、彼女は日本人男性を配偶者として選択し、出身文化を一定程度保持しながら、日本文化とは大幅に異なる、自ら行動パターンを調整し、家庭内生活パターンを日本式に合わせてきた。性役割分業意識が強い日本社会だからこそ女性の役割が明確であり、文化的な同化が求められる面も否定できない。文化的に同質性に向かう過程ないしその終点として定義される同化だが、Kさんの事例から見た家族生活は限りなく日本家族に近いものであり、同化圧力に屈していると言えよう。

文化的差異が大幅に解消され、夫と妻という役割分担は日本的となってきたが、二文化性は子ども世代の進路選択に反映されており、二文化性が萌芽している。このことは今後、彼らの人生も配偶者選択にも反映されると考えることもできる。

Kさんは地方社会のミドルクラスの中で生活し、ある意味平均的な日本人同士の家族に囲まれて生活してきた。彼女が生活してきた時代の背景も地域文化も一般化できるかは議論にもなり得るが、外国人女性であれば、誰でも直面するような課題にぶつかっていたことは確かであろう。結婚前から本人の中で日本社会への理解が育まれていたことが結婚後の生活に大きく関係したことも考えられる。自然な状態ではない経済的理由や在留資格の拘束の中で日本人男性と結婚を決めた外国人女性（中国、フィリピン、ロシア語圏など）の家庭内の生活パターンは、Kさんとは大きく異なる。先行研究の中で描かれてきた日本人男性と結婚している外国人女性像とは異なる文化、生活様式を本稿で見ることができたといえよう。

今後の課題

今回のインタビュー調査では触れることが難しかったが、男性優位の日本社会では、性役割分業の面から国際結婚夫婦を考察し、家庭内生活の中における意思決定、相談事など側面からの考察も必要であろう。

更に子ども世代に着目し、子どもの思考と行動パターンの考察、日本の教育機関で教育を受けている者とそうでない者の事例から考察していくことも今後の課題である。

国際結婚の中で、新しい共同体が出現する予兆が見られる現象に着目した研究を更に深めていく必要がある。

参考文献：

- ・河原俊昭・岡戸浩子編著、2009『国際結婚 多言語化する家族とアイデンティティー』明石書店
- ・小島宏、1992「先進国における国際移動者と結婚」『人口問題研究』、48-1 pp.38-49.
- ・佐竹眞明、2012「東海地域の外国籍住民と多文化共生論」『在日外国人と多文化共生 地域コミュニティの視点から』明石書店 pp.28-39.
- ・佐竹眞明、2006「フィリピン 日本国際結婚 移住と多文化共生」めこん、pp.110-119.
- ・篠崎正美、1996「国際結婚が家族社会学研究に与えるインパクト」『家族社会学研究』 8号、pp.47-51.
- ・賽漢卓娜、2007「中国人女性の「周辺化」と結婚移住－送り出し側のプッシュ要因分析を通して－」『家族社会学研究』 19号(2)、pp.71-83.
- ・武田里子、2012「多文化家族の課題と可能性」『3.11後の多文化家族～未来を拓く人々～』川村千鶴子など、明石書店、pp.163-177.
- ・田辺俊介、2008年10月「日本人の外国好感度とその構造の実証的検討」『社会学評論』 234号、pp.369-387.
- ・ダアノイ・メアリーアンジェリン、2006「日本を第二の故郷に：多文化共生を求めるフィリピン女性」『フィリピン 日本国際結婚 移住と多文化共生』めこん、pp.112-127.
- ・増田光吉、1970「アメリカの家族・日本の家族」NHKブックス
- ・ムヒナ パルバラ、2013「国際結婚の社会学 日本におけるロシア語系

女性の事例」熊本大学社会文化科学研究科博士論文

- ・新田文輝 藤本直訳, 1992『国際結婚とこどもたちー異文化と共存する家族』明石書店
- ・竹下修子, 1998「国際結婚に対する社会の寛容度」『家族社会学研究』10(2), pp.71-82.
- ・竹下修子, 2001「国際結婚カップルの異文化適応と結婚満足度」金城学院大学紀要, pp.127-137.
- ・竹下修子, 1997「国際結婚カップルの異文化適応に関する研究」『現代の社会病理』12, pp.91-102.
- ・ヤンソン由実子, 1981『国際結婚 愛が国境を越えるとき』めこん
- ・柴田博, 1978「日本人の国際結婚許容度」『日本人研究』No.5 特集 日本人の対外国態度 至誠堂, pp.45-79.
- ・古波蔵香咲花, 2010「国際結婚家族の現状と課題に関する一考察：沖縄県における事例から」『沖縄大学文学部紀要』第12号, pp.95-107.
- ・柏崎千佳子, 2011「象徴的エスニシティの難しさ 比較の視点からみた日本の移民・同化・市民権」『東京大学アメリカ太平洋研究』, 第12号, pp.33-39.
- ・實川慎子・砂上史子, 2012「就労する母親の「ママ友」関係の形成と展開」『千葉大学教育学部研究紀要』第60巻, pp.183-190.
- ・Imamura Anne, 1990, “Stranger in a Strange Land: Coping with Marginality in International Marriage”, *Journal of Comparative Family Studies*, vol. XXI:pp.171-191.
- ・Imamura Anne, 1988, “THE LOSS THAT HAS NO NAME: Social Womanhood of Foreign Wives”, *Gender & Society* 2 (September): 291-307.
- ・Cottrell Ann Baker., 1973, “Cross National Marriage as an Extension of an international Life style: A Study of Indian-Western Couples”, *Journal of Marriage and the Family* (November), pp.739-741.
- ・Cottrell Ann Baker, “Cross-National Marriages: A review of the literature”,

Journal of Comparative Family Studies pp.151-169.

- Jacobs Jerry A. and Labov Teresa G.,2002 “Gender Differentials in Intermarriage Among Sixteen Race and Ethnic Groups”, Sociological Forum, Vol.17, No.4, December, pp.621-642.
- Donnan Hastings, 1990, “Mixed Marriage in Comparative Perspective: Gender and Power in Northern Ireland and Pakistan”, Journal of Comparative Family Studies, 21, pp.207-225.
- Roer-Strier Dorit and Ben Ezra Dina, 2006 “Intermarriages between Western Women and Palestinian Men: Multidirectional Adaptation Processes”, Journal of Marriage and the Family (February), pp.41-55.
- Burgess Chris, 2004, “Reconstructing Identities: International Marriage Migrants as Potential Agents of Social Change in a Globalising Japan, Asian Studies Review(September), Vol.28, pp.223-242.